

女の眼に力がいって、光るのを見た。2つの雨傘がテント状に重なり合った。X氏は、垂直に立つ1本の硬い棒になった。女の白い顔が黒い髪の毛に消えた。匂いたつ髪の香りがX氏の鼻を刺激した。X氏は、眼を見開いて、黒く動く頭を見おろして、凝っと立ち続けた。

女の唇は、長い間、X氏の左手の甲に吸いついたままだった。痙攣の波が3度X氏の全身を駆けぬけた。陶酔が来た。傷が女の唇のなかで呼吸している。女は、一瞬、唇を手の甲から離して、顔をあげ、私、あなたの正体がわかったわと呟くと、もう一度、X氏の左手に唇をあてて、強く、やわらかく吸った。X氏は、女が唇そのものとなって、自分のなかへぐいぐいとはいってくるのを感じた。女は、X氏のなかを自由自在に流れていった。

X氏は、ビッグ・パンの風の音を聴いた。

6

眼のなかで石がつるんと滑った。

それが合図だった。雨が降りはじめ99日目の朝だ。X氏は、いつもの、駅のホームに立って、電車を待っていた。昨日の朝と同じ位置だ。赤茶けたレールの間に、無数の石がある。鉄粉を浴びて、表面が茶色っぽくなっている。今日は、見なれた石が、妙に強く存在している。いつも、特別気にとめることもなく、何千回も見ているが、今日ほど、石の強度を感じたことはない。どこにで

もある。ただの石ころだ。長雨に濡れて、淡い水の膜が表面にかかり、微かに光っている。昨日も、確かに、同じようにそこにあつたはずだ。しかし、それは、正確でないかもしれない。

ひとつの石ころが動いた。眼のなかで、貝殻のように静まりかえっていた石が、微かに移動した。X氏は、眼を疑って、もう一度、その石を見た。ゆらぎの波が起こった。ひとつの石が眼のなかでつるりと滑ると、もうひとつの石も微かに移動した。石の群れは、次から次に、まるで、鳥たちが声を掛け合うかのように、大きなゆらぎの波となって揺れはじめたのだ。

はじめて見る石の貌だった。

石に固有な性質が消えてしまって、硬い輪郭がぼやけ、形が溶け、硬度がやわらかくなり、中心がなくなり、まるで綿か何かのように、軽くなり、不意のゆらぎの波のなかを、左に右に、上、下に漂いはじめた。

痙攣が来た。痙攣と同時に、風景が稀薄になってX氏から遠去かった。X氏は、頭のなかで、石が移動するはずがない、いつも、同じように、そこに静止しているのが石じゃないかと思った。痙攣のせい、痙攣なら2〜3秒で終るはずだ。幻影ならば消えてしまう。X氏は待った。石の群れのざわめきは鎮まらない。X氏は、草むらのゆらぎを思い出した。あれと同じだ。中空に光が白く煌めいた。おそろしいほどの輝やきだ。X氏は光に射し貫かれた。身体が宙に浮いた。いや、自分の身体だという感覚がない。あらゆる臓器・器官は連結していたが、光のなかに、すべての表面を